

研究主題 自閉症のある子の特性理解と効果的な支援のあり方

～将来を見つめ、その子らしさと主体性を大切にしたいかかわりを通して～

要約: 知的障害と自閉症のある子どもたちにとって効果的な支援のあり方を探るため、将来を見通して、「その子らしさ」と「主体性」を大切にしながら実践を行った。その中で、自閉症の特性を十分理解した上で、アセスメントにより子どもの姿を捉えることが、支援の出発点になることがわかった。また子どもの好きなことや得意なことを生かし、苦手な部分については支援をし、本人にわかりやすい環境を整えていくことは有効で、子どもは安心し、主体的に取り組み自分の力を発揮できることがわかった。さらに、指導・支援の際に、将来を見通す視点を加えたことによって、それが子どもの生活の広がりにつながった。

キーワード: 知的障害, 自閉症, 将来を見通す, その子らしさ,好きなことや得意なこと, 主体性

I 主題設定の理由

私の所属する知的障害養護学校では、障害の多様化が進んでいる。その中で、自閉症のある子は約半数を占めている。全国調査においても知的障害養護学校の小学部で47.5%、中学部で40.8%の子どもたちが自閉症、もしくは自閉症の疑いがあると報告されている(H16.国立特殊教育研究所による)。子どもとのかかわりにおいて、自閉症の理解は必要不可欠である。

子どもたちは、それぞれに個性的で魅力的な存在である。一方で、自閉症のある子には、見え方や聞こえ方、感じ方、周りの状況のとらえ方等に特性があり、思いをどう理解したらよいか悩むことも多かった。自分なりに文献や研修で学んできたが、一人一人の子どもたちの姿は様々である。特性の理解をさらに深め、効果的な支援のあり方について、子どもの将来の生活をも含めた大きな視点で学びたいと考える。

II 研究の目的

自閉症の特性を理解し、将来を見据えた上で、知的障害と自閉症のある子が、その子らしさを生かし、主体的に活動に取り組みながら、より力を発揮できるような支援のあり方を探る。

III 方法

1. 自閉症の特性について理解する。
2. 効果的なアセスメントについて知る。
3. 特性にあった指導法(支援の方法)について学ぶ。
4. 将来を見通した支援について、関係機関へ聞き取り調査をする。
5. より力を発揮しやすい学校生活のあり方について各校の取り組みから学ぶ。
6. 授業実践を行い、効果的な支援のあり方について考察する。

IV 研究の内容

1. 自閉症の特性の理解について

(1) 自閉症とは

自閉症とは、①対人関係の質的障害、②コミュニケーションの障害、③活動と興味の著しい限局性、の3つの領域に発達の偏りがあり(図1)、医学的診断基準に基づき、これらの行動の特徴が乳幼児期(通常3歳以前)から見られ生涯にわたって続くと判断された場合に診断される。

この3つの特徴以外にも、感覚の過敏性・鈍麻性、シングルフォーカス(一度に1つのことにしか注意が向かない)、選択的注意の困難(多くの情報から必要なものを選択して注意を向けることが難しい)、タイムスリップ現象(過去の経験が鮮明に蘇る)などが見られることがある。また様々な要因により、不適切な行動が生じる場合もある。



図1 自閉症の3つの特性

(2) 特性に合わせた支援

① 「対人関係の質的障害」に対する支援

- ・好きな、楽しい活動を人と一緒にする。
- ・一人でできる活動や仕事を増やして、それを人に認められるようにする。
- ・約束事を教えていく。

② 「コミュニケーションの障害」への支援

- ・視覚的な情報で、ことばの理解の苦手さを補う。

- ・抽象的なことの理解は苦手であり具体的にはつきり伝える。

③「活動と興味の範囲の著しい限局性」への支援

- ・予告をして不安や理解困難による混乱を避ける。
- ・いつ、どこで、何を、どのように、どれくらい、いつまでするのか、終わると何があるのか等を伝えていく。
- ・決まった流れ、繰り返しは得意なので生かす。

④その他の特性への支援

- ・感覚の過敏性、鈍麻性に配慮し、苦手な刺激は取り除く。徐々に耐性をつける。
- ・シングルフォーカスについては、課題を絞る、一つずつ順々に進められるようにする。
- ・タイムスリップ現象については、不快体験を繰り返し重ねてしまわないように配慮する。

⑤不適切な行動に対する支援

- ・環境と日課とを構造化し、組織化し、予測可能なものにする。また変更は計画的に行う。
- ・コミュニケーションの方法を工夫する。
- ・苦痛な環境要因に対処する方法を見つける。

子どもが安心して過ごすことができるようにし、その上で環境設定を工夫し、子どもに合わせた課題に取り組んでいくことが大切になる。

2. 効果的なアセスメントの方法について

アセスメントとは、「個人の状態像を理解し、必要な支援を考えたり、将来の行動を予測したり、支援の成果を調べること」である（佐藤，2004）。子どもの特性や障害から生じる困難さだけでなく、周囲の人や環境を含めた子どもの生活を理解する必要がある。

なお、自閉症のある子どもの姿を捉え、指導に活用することのできる心理検査としては、PEP-R、WISC-III、新版 K 式発達検査、KIDS、新版S-M社会生活能力検査、CARS 等がある。これらを子どもに合わせて組み合わせることで、よりの確なアセスメントと指導が可能になる。

3. 特性に合った指導法について

(1) TEACCHプログラムについて

アメリカのノースカロライナ州から広まった包括的プログラムで、自閉症の人が社会の中で有意義に暮らし、できるだけ自立した行動ができるように支援する。「構造化」や「コミュニケーションプログラム」などの技法は有効である。

(2) AAC (補助・代替コミュニケーション)について

AAC とは、「ことばに代わったり、ことばを補うようなサイン言語や図形シンボル、またテクノロジーなどを使って、コミュニケーションを成立させようとした指導の領域やその考え方」(津田, 1998) のことである。子どもに合わせて適切な手法を選び、子どもの変容に応じて変化させていく。

(3) 支援ツールについて

子どもの「長所・強みを生かして」「できることを」「とことん伸ばす」ことを大切に、4つの支援ツールを活用する。支援環境を整える協働ツール(サポートブック等)、自発

を促す手がかりツール(スケジュール等)、実行を助ける手がかりツール(自助具、コミュニケーション拡大手段)、認め合う関係を作る交換記録ツール(チャレンジ日記)である。

(4) NC-プログラムについて

のぞみ発達クリニックにて、開発・体系化された発達障害のある子どもの指導者用マニュアルであり、「活用マニュアル」と「発達アセスメント」、「指導プログラム」で構成されている。子どもの今の現状を発達チェック項目で把握し、ターゲット領域を選定し、効果的に発達を促進していく。

(5) ソーシャルスキルトレーニングについて

具体的に、ソーシャルスキルの「やり方」や「こつ」を教えることで、子どもたちの生活がより豊かになるように支援するものである。教示、モデリング、ロールプレイング、フィードバック、般化といった指導技法を用いる。

4. 将来の姿を見通した支援について

養護学校の教員、保護者、企業を対象に実施された「障害のある生徒のインターンシップに関するアンケート」(石川県教委, 2006 実施)では、企業、保護者、教員ともに求められる資質として半数を超えていたのは、生活面では「挨拶、返事ができる」、作業面では「作業意欲がある」、対人面では「質問ができる」等であった。一方、自閉症の居住型施設「おしまコロニー」の寺尾(2004)は、基本的生活習慣や手伝い、余暇の利用、コミュニケーション、スケジュールの利用、社会的行動や対人行動を身につけていくこと等の重要性を述べている。

これらをふまえ、実際はどうかをさらに知りたいと考え、大人の自閉症のある人たちとかわりのある関係機関に聴き取り調査を実施した。

北陸3県の自閉症の特性に配慮した授産施設等

北陸3県の発達支援センター

石川県内の知的養護学校の高等部進路指導担当者

どんな支援が有効であるか、幼少期から大切にしたいことや将来につながる支援等について探ってきた。その中で、チェック式のアンケートを実施し、12名の関係者より、回答があり、次のような結果を得た。(図2)



図2 自閉症のある子に、幼少期より特に大切にしたい指導内容

自閉症の特性を考慮して、6割以上の方が「適切な自己表現」、「基本的な生活習慣」「経験を広げる」「適切な社会的行動や対人行動」「手伝い、役割」「余暇」の

大きさをあげている。

次に、聴き取りの中でのキーワードを整理してみた。図3、4にあるように、大人の側に対しては、ネットワークづくり、家族支援、周囲が本人を十分理解すること等の課題があがった。子どもへの支援としては、環境設定を工夫すること、信頼関係作り、好きなこと等を生かすこと、自己選択、生活を地域へ広げる等であった。特に努力して達成できた満足感は、自己肯定感を育み、自信や意欲につながるとの話があった。

自閉症のある子どもたちへの今後の指導に生かしたい貴重な情報を得ることができた。



図3 聴き取りでのキーワード (大人側)



図4 聴き取りでのキーワード (子ども)

5. 特性にあった、より力を発揮しやすい学校生活づくりについて

自閉症の特性に配慮した取り組みを行っている学校について、文献や web ページで調べた。そのうち、富山大学人間発達科学部附属特別支援学校と長野県飯田養護学校を見学した。前者は、チャレンジタイム(子どもが自分の課題に取り組む)を带状に時間割の中に設定し、支援ツールを活用して、子どもたちの主体的な姿を引き出す取り組みを学校全体で行っていた。後者は、領域・教科を合わせた指導を中心に「自分から、自分で、めいっばい」に取り組む子どもが育つ生活づくりをめざし、視覚支援を取り入れ、できる状況づくりを工夫している。

各学校に共通していたのは、「保護者のサポート」、「地域生活の充実」、「関係機関との連携」、「一人一人に合わせた“できる”“わかる”ための工夫」「学校としての統一」であり、子どもたちの主体的に取り組む姿を大切に、社会参加をめざし取り組んでいることがわかった。

6. 授業実践

自閉症の特性の理解やアセスメント、自閉症の特性に合った指導方法や聴き取り調査から得たこと等を生かして、

授業実践に取り組んだ。

(1) 目的: 将来を見つめ、その子らしさと主体性を大切にしたいかかわりを通して、効果的な支援のあり方について事例を通して検証する。

(2) 対象児童: 養護学校小学部児童

(3) アセスメント

担任、保護者、関係機関からの情報、行動観察、心理検査(NC-プログラムやPEP-R等)からの情報を得た。

好きなことや得意なこと (良さ、強み)

興味を持てると意欲的、視覚優位、文字への関心、言語理解や模倣に芽生え、操作的活動が得意

苦手なこと (支援が必要なこと)

音声言語がない、音声言語の理解が難しい、自分の思いを伝える手段が少ない、スケジュールがわからず見通しが持ちにくい、待つことが苦手、やや聴覚過敏あり

(※個別の教育支援計画、個別の指導計画は省略)

(4) 児童の姿から授業を設定しての実践

アセスメントからわかることと将来を見据えた視点から、本児にとって、「自己表現」や「見通しを持って自分で考えて行動する」ことが大切な課題であると捉え、下記のように授業を設定した。

① 国語・算数・自立活動の指導(7月～11月、週1回、計12回)
(指導日以外は、担任が継続して指導を行った。)

- ・国語・算数の学習に見通しを持って進んで取り組む。
- ・スケジュールの意味を理解する。
- ・身振りサインや絵カード、ボカ(音声機器)などを利用してやりとりをする。

② 日常生活の指導「ティータイム」(10月、連続11回)

- ・コミュニケーションボードで、必要な絵文字カードを選び、組み合わせて要求を伝える。
- ・身振りサインやカードで、要求や許可、拒否を伝えて、やりとりをする。
- ・選択肢の中から、ルールに沿って自分の欲しいものを選択する。また、選ぶ楽しさを体験する。

③ 授業観察「生活単元学習」(10月、連続6回)

単元「祭りだ、わっしょい!」の中で、より主体的に取り組めるように担任と話し合い、本児の変容を捉えた。

この単元は小学部9名で、3週間、体育館を中心に活動したものである。授業観察を行った期間はその内の一歩である。活動は、踊り→ゲーム→いろいろな遊びのお店で楽しむ→食べ物のお店を回る、という流れで展開した。本児の様子に合わせ、見通しを持って楽しく活動できるように、手だてを見直ししながら進んだ。

(5) 結果と考察

① 国語・算数・自立活動

- ・文字と絵や具体物が合致するものが増え、30程度になった。また音声と文字が10文字以上結びついた。
- ・相手の口の動きを見て真似る場面が増えた。
- ・算数では、3までの数量理解ができた。5までの数もほぼ理解した。10までの数列をほぼ理解した。また、

本児の好きな形や色の弁別がより細かくできた。

- 数の理解は、ティータイムでの選択場面や学校から好きな本を借りる時のやりとりで役立った。
- スケジュール(写真1)が理解できるようになり、一日の予定へと広がった。今すぐしたいと思ったことも、スケジュール上でやりとりすることで納得して待てるようになった。
- ボカや絵カードで自分からやりとりできることが増えた。



写真1 スケジュールの広がり

②ティータイムの指導

- 自分で絵カードを4~5枚構成して、教師に手渡して思いを伝えられた(写真2)。伝わるのがうれしい様子で、自分からできた。指導前に比べ、やりとりに使うカードが広がり、お菓子や絵本などのカードも含めると、40枚程度に増えた。自分から伝える回数や場面も増えた。



写真2

コミュニケーションボードで

- 拒否、許可についても、できるようになっていった。

③生活単元学習

- それぞれの活動において、自分から行動できることが日ごとに増えていった。
- 自分からスケジュールを出して確認するようになり、援助がなくても自分でできる部分が増えていった。
- 友達の活動の様子を見て、新しいことにも関心を示す姿があった。
- 活動が楽しみになり、教室で自分からパネルに活動の写真を2枚貼って担任に伝えて、うれしそうに待つ様子が見られた。

④心理検査やビデオ分析より

指導を終えて、NC-プログラムとPEP-Rを行った。読字に大きな伸びが見られ、書字においては新たな芽生え項目が多く見られた。また知覚や言語理解の領域が伸びている。得意な部分や芽生えの見られる部分を中心に指導を進めてきたが、結果、全体に伸びが見られた。また、人とかかわりと感情の領域においての行動問題が減少した。これは本児の姿に合わせた支援や、自分の思いを表現して受け止められる経験の中で、人と過ごすことに安心感を覚えてきているためと考える。また、毎日続けて取り組めたことと、学校生活全体の学習や活動が関連し合っ、このような結果を導いたと考える。

国語・算数・自立活動において、見通しを持って自分で取り組んでいたかどうかをビデオで分析した。教師のプロンプト（援助）が減っていれば、自分から取り組んでいたと考える。結果は図5のようになった。本児の好きなことや得意なことを取り入れて、安心して取り組めるように環境に配慮してきたことで、このような結果になったと捉える。見通しを持って自分から学習できていたと考える。



図5 国語・算数の時間の教師の援助の回数

また生活単元学習におけるビデオ分析で、自分から活動できた場面や、活動の広がりなどを捉えた。回を重ねるごとに変容が見られた。(図6)

本校では、領域・教科を合わせた指導を学校生活の中心に据えている。子どもに合わせて柔軟に活動内容が工夫でき、好きなことや得意なことを生かしやすい。主体性が発揮されやすく、活動を広げやすいと考える。本児の様子からも、そのことが伺える。

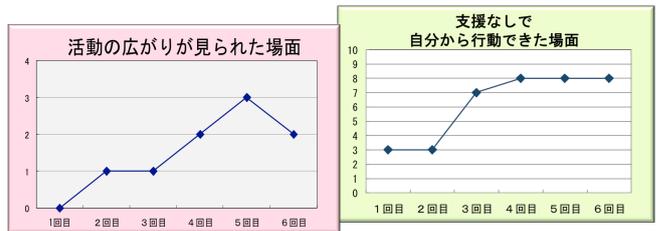


図6 生活単元学習における

活動の広がり自分から行動できた場面の数

V 結論

- 子どもに合った指導や支援を考える際に、自閉症の特性を理解した上で子どもの姿をアセスメントすることは有効である。
- 子どもの好きなことや得意なことを生かし、本人にとってわかりやすい環境を整えることは有効で、子どもは安心し、主体的に取り組み、自分の力を発揮する。
- 自閉症のある子にとって大事な指導内容に、将来を見通した視点を加えて指導・支援を行うことは、子どもの生活を広げることにつながる。

VI 今後の課題

- 子どもたちの生活を地域へと広げていくことを意識し、楽しい活動内容や具体的な支援を計画する。
- 支援が継続されるように、誰にでもできそうな支援の方法を提案し、保護者等と共有していく。また、支援のためのツールを共有できるように学校環境を整えていく。

